

自分を高める系



目標を持つ力
(夢・目標を持つ)

挑む力
(やってみる・挑戦)

自分と向き合う系



あきらめない力 (粘り強さ) 自己調整力
(自分を調整する力)

太子町**幼小中一貫教育**で伸ばす・育む

非認知能力 実践ガイド & 事例集

つながる系



伝える力 (気持ち・意見を)

受け入れる力 (相手を)

協働する力

発行にあたって



太子町非認知能力アドバイザー
徳留 宏紀氏

2022.4～ 岡山大学大学院 教育科学専攻
2023.1～ ヘルシンキ国際高校（フィンランド） ティーチーアシスタント

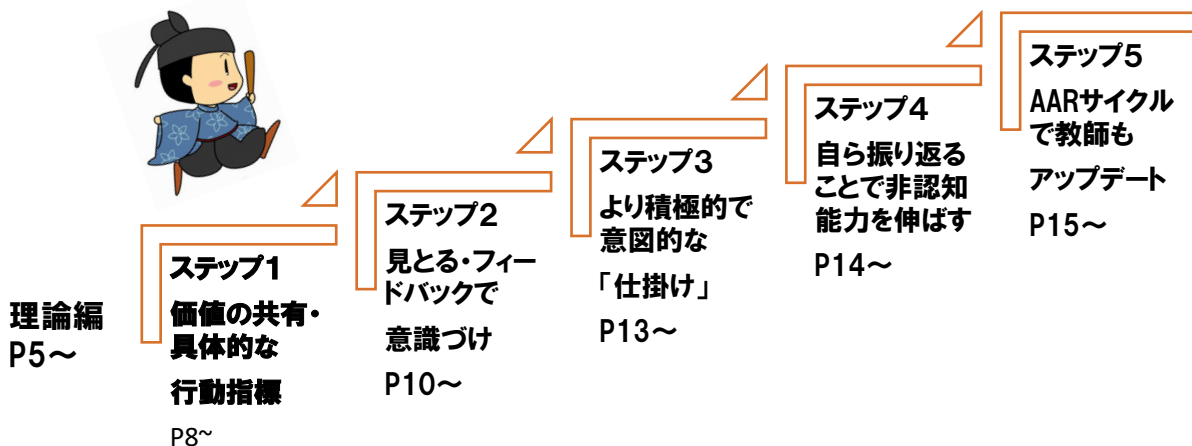
教育コンサルタントとして、全国の教育現場で講演会を実施。幼小中高にて、「非認知能力」を軸とした教育実践の伴走を行っている。

太子町の子どもたちのために尽力くださり、ありがとうございます。この実践事例集は、先生方が日々、創意工夫を凝らした教育活動を行っている賜物であります。今後よりよい幼小中一貫教育を実現していくためのヒントとして研修などでお伝えした内容を太子町教育委員会とともにまとめました。ご活用いただけますと幸いです。

実践ガイド&事例集の構成

令和4年から始まった太子町の幼小中一貫教育の大きな柱のひとつとして子どもの非認知能力を伸ばす教育があります。本書では前半で「非認知能力をのばす実践にあたっての理論とノウハウを実践ステップとしてまとめ、後半で先生方の実践事例を紹介します。

前半：実践ステップ



後半：事例集

非認知能力を伸ばすといっても、具体的にどのような取り組みを通して伸ばすのか、実践方法は何かあるのか、他の先生はどのような取り組みをされているのか、たくさんの疑問が出てきます。非認知能力を伸ばす方法の答えは一つではありません。誰一人同じ先生や同じ子どもはいないからです。そこで、様々な先生方の実践を紹介することで、自分のやり方に合った方法やヒントを得てもらえたらとの思いで、令和4年2学期にそれぞれの先生が実践された取り組みを集め、まとめました。

実践で使われたプリントなどもダウンロードできるようにして下さっている先生もいらっしゃいますので、ぜひ参考にさせていただければ幸いです。

印刷版（本冊子）には紙面の都合上、限られた事例を紹介しています。全事例を紹介した電子版をダウンロードできるようにしています。電子版は各校へ通知したURLからご覧ください。なお、電子版の事例集は太子町のgoogleアカウントでログインした場合のみ閲覧できます。

太子町の公教育全体で育む、非認知能力！

令和4年に改訂された生徒指導提要に記載された「発達支持的生徒指導」には児童生徒への声掛け、授業、行事等を通じて、自己理解力、コミュニケーション力、共感性等を含む社会的資質・能力を育成すると記されています。

特別の教科道德の「道德性」には人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指して行われる道德的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものであると記されています。

学習指導要領には育成を目指す資質・能力を明確にし、「学びに向かう力・人間性等の涵養」が明記されています。学びに向かう力・人間性等とは児童生徒が「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」に関わる資質・能力と記されています。

生徒指導提要や学習指導要領に記載されている「資質・能力」とは具体的に何なのか？ 道德性の人格の基盤をなすものとは具体的に何なのか？それら全てに共通することは、**客観的に数値化できない力＝非認知能力となります。**

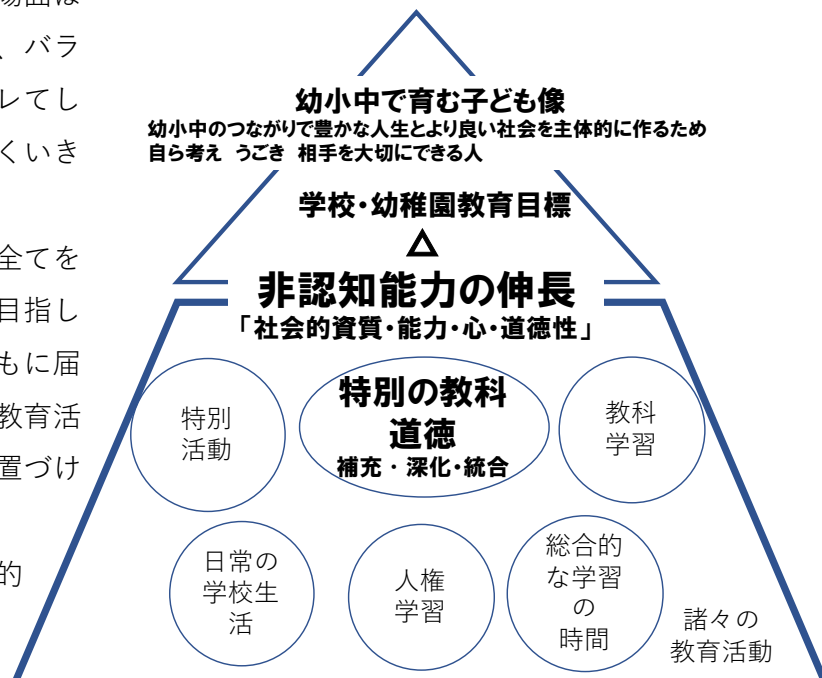
それぞれバラバラに取り組むのではなく

関係性・系統性を大切にすることで更に大きな力に！

生徒指導、授業、道德、特別活動など場面は違いますが、それぞれの関連性を考えず、バラバラに取り組むと「大切にすることがブレてしまったり、子どもに届かない」などうまくいきません。

生徒指導、授業、道德、特別活動など全てを学校教育目標・幼小中で育む子ども像を目指して取り組むことで大きな力となって子どもに届くのではないのでしょうか。それら全ての教育活動に共通する基盤として非認知能力を位置づけます。

そして、非認知能力を伸ばすことで客観的に数値化できる力＝「認知能力」も伸ばす。バラバラではなく、それぞれの先生や学校の実践がつながり、系統性をもつことができる幼小中一貫教育を目指します。



幼小中一貫教育で育む子ども(人)

認知能力も非認知能力も大切にする太子町の幼小中一貫教育

令和4年度から太子町では幼小中一貫教育を進めています。その中心的なカリキュラム構成の一つが「非認知能力」をテーマとした取り組みです。

令和4年8月に開催した研修で太子町立小中学校園の全先生が、太子の子どもの良いところ・課題・義務教育後について欲しい力、そしてこれまでの教育実践で大切にされてきた「非認知能力」について考えました。それを分析し、幼小中一貫教育で育む「子ども像」「太子町で育む主な非認知能力」としてまとめました。

その結果、太子町の先生方は幼小中ともに「つながる力」を大切にされてきたことがわかりました。そして、義務教育終了時には粘り強く考える力・行動に移す力、そして仲間を大切にする力を子どもにつけて欲しいという想いが強いことがわかりました。

幼小中一貫教育を通して どのような子ども(人)を育てるのか？

幼小中一貫教育で育む人

幼小中のつながりをもとに

豊かな人生とより良い社会を主体的につくるため

自ら考え、うごき、相手を大切にできる人

予測困難な時代（VUCA時代※）に対応する力としてOECD Education2030で扱われている「Well being」と「Agency」の考え方をもとに「豊かな人生とより良い社会を主体的につくるため」を盛り込みました。

「Well being」（良いあり方）

多様な価値観が大切にされる時代の「良いあり方」は、ひとりひとりにとって理想的な状態・人生を意味するものと定義しました。ひとりひとりにとって「良いあり方」を見つけ、実現できる社会が豊かな人生につながるとして「豊かな人生をつくる」を育む子ども像に盛り込みました。

「Agency」

OECDのEducation2030では目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力として定義づけられています。先行きの見えない、変化の激しい時代に変化に対して受け身で心配するだけでなく、自ら責任を持って変化を生み出せる力をすべての人が持つことで豊かな人生とより良い社会につながるとして「より良い社会を主体的につくる」を育む子ども像に盛り込みました。

※VUCA時代とは、Volatility・Uncertainty・Complexity・Ambiguityの頭文字を取った造語で、社会やビジネスにとって、未来の予測が難しくなる時代のことを意味します。

太子町で育む、非認知能力！

非認知能力は社会の変化に対応できる力

これまでの社会は、知識・技能といった「認知能力」が評価の基準となり、その知識や技能を身につければ社会で対応できると言われていました。

しかし、これからは社会や生活が急速に変化し、予測ができない時代（VUCAの時代）と言われています。

その社会変化に対応する力として「非認知能力」が注目されています。現行の学習指導要領でも「学びに向かう力、人間性等」として非認知能力として取り上げられています。

V olatility 変動性	U ncertainty 不確実性
C omplexity 複雑性	A mbiguity 曖昧性

太子町で育む主な非認知能力と定義

太子町の先生方がこれまで大切にされてきた数値化できない力＝非認知能力を令和4年8月1日の研修で太子町の幼小中一貫教育で大事にしたい非認知能力としてまとめました。それぞれの学校園で場面に応じて適切な力を育むことを意識した教育活動をおこないます。



自分と向き合う系の力

▷あきらめない力：粘り強く取り組む力

▷自分を調整する力：

思い通りいかないことがあっても気持ちを切り替える力



自分を高める系の力

▷目標・夢を持つ力：なりたい自分・理想を描く力

▷挑む力：何事も、まずやってみる力



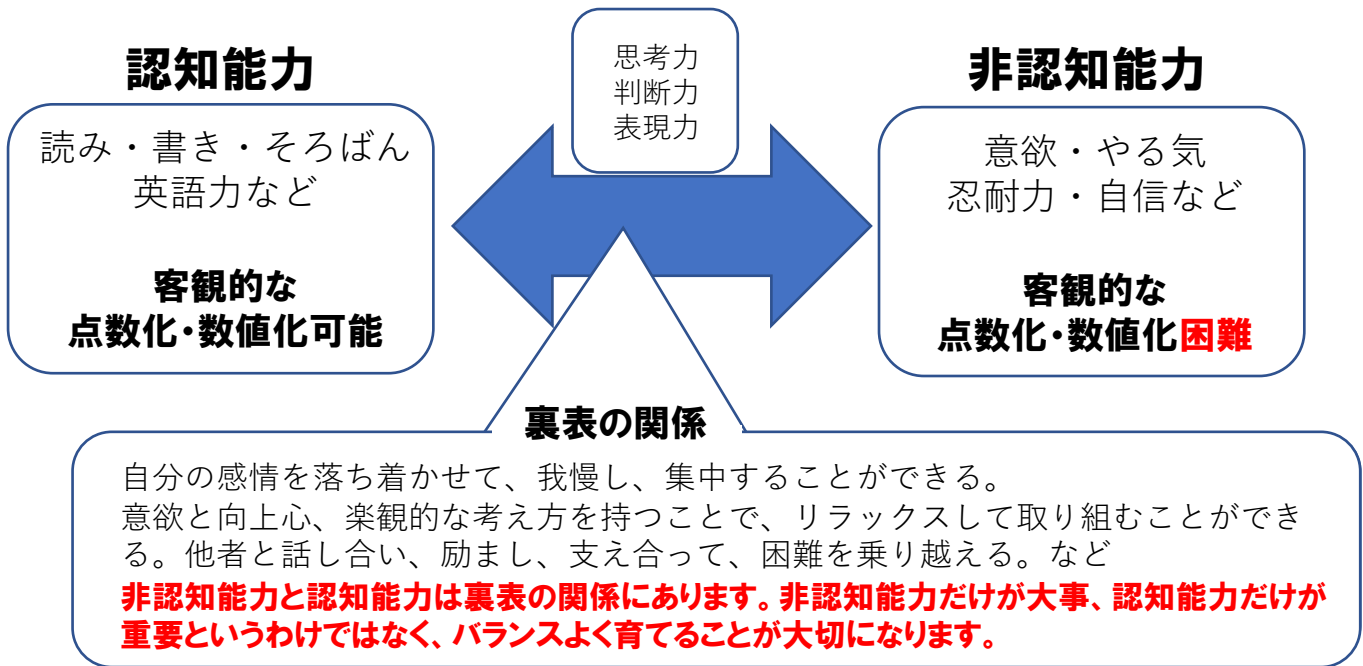
他者とつながる系の力

▷協働する力：他者と一緒に目標達成のために協力する力

▷受け入れる力：相手の立場を理解し、相手のことを認める力

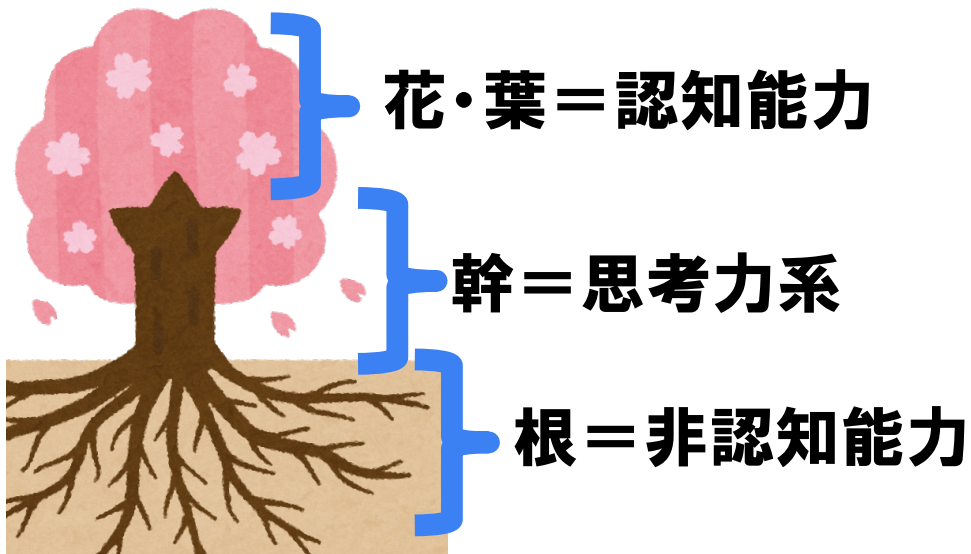
▷伝える力：自分の思いを発信する力

非認知能力は 「客観的に点数化できない力」のこと！



しっかりと「支える基礎」を整えましょう

木に例えると、認知能力は美しい花や、青々とした葉といった目で見える部分です。美しい花や青々とした葉があるのは、大地に根を張り、肥沃な大地から栄養を吸収できる根の存在が欠かせません。根は地上からは見えません。学力も同様に、客観的に数値化できる認知能力は、客観的に数値化できない非認知能力がしっかりと根を張ることが大切となります。



学校園で育む非認知能力は大きく3つの力に分けられる

たくさんの「非認知能力」を大きく3つの力に整理しています。また、3つの力はお互いに絡み合いながら高めることができます。

3つの力はやみくもにいっぺんに高めようとするのではなく、**高めたい力を決めて意識すると他の力と絡み合いながら伸びていく**ものです。

自分と向き合う力

- 自制心
- 忍耐力
- レジリエンス(回復力)



自分を高める力

- 意欲・向上心
- 自信・自尊感情
- 楽観性






他者とつながる力

- コミュニケーション力
- 共感性
- 社交性・協調性



非認知能力は高ければ良いのではない！

認知能力は高ければ高い方が良いと単純ですが、非認知能力は違います。非認知能力にはプラス面とマイナス面があるからです。大切なことは、それぞれの場面で適切な非認知能力を活かすことができるかになります。非認知能力の主な特徴を以下にまとめました。

非認知能力	特徴 (○プラス面・●マイナス面)
 自分と向き合う力	<ul style="list-style-type: none"> ○いつも安定していて、表情や態度に落ち着きがある。 ○辛いことがあっても、気持ちを切り替えて、再び取り組むことができる。 ●周囲に対して自分の感情の変化が理解されにくい。
 自分を高める力	<ul style="list-style-type: none"> ○新しいものを好み、そこに喜びを感じられる。 ●新しいものを好むために、一つのことを持続しにくい。
 他者とつながる力	<ul style="list-style-type: none"> ○他者との意思疎通を取りやすい発信と受信ができる。 ●相手に心を砕きすぎてしまい、精神的に疲弊しやすい。

理論編：非認知能力の伸ばし方

非認知能力は特別なトレーニングではなく 「自分の意識」で伸ばせる力！

非認知能力は外から与えようとするものではなく、子ども自身が意識して行動することで伸ばすことができる力です。自分で「やってみたい」、「やってみよう」と意識し、その状況に応じた言葉や行動は何かベストなのかを、自分で意識できるようになれば、伸ばすことができます。周りの大人は子どもが意識できるような仕掛け作り・環境づくりを意識して取り組みましょう。



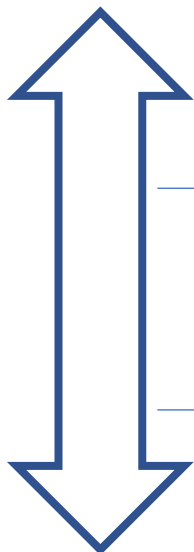
「やってみたい！
やってみよう！」

という意識を自分の中に
持っていれば、それに
応じた行動に結びつき
やすくなります。

大人は子どもが意識できる
仕掛け作りを！

非認知能力にはレベルの違いがあるから いつでも伸ばすことができる！

変容しやすい



行動
話し方・聞き方
ふるまいなど

自分の意識でコントロールしやすく、習得しやすい非認知能力

**価値観
自己認識
行動特性**

発達過程の様々な経験と学びの中で形成される汎用性の高い非認知能力

主に小中学校で伸ばす非認知能力の対象領域

**気質・性格
基本特性**

乳幼児期などの早いうちに形成される基盤となる非認知能力

主に幼稚園で育む非認知能力の対象領域

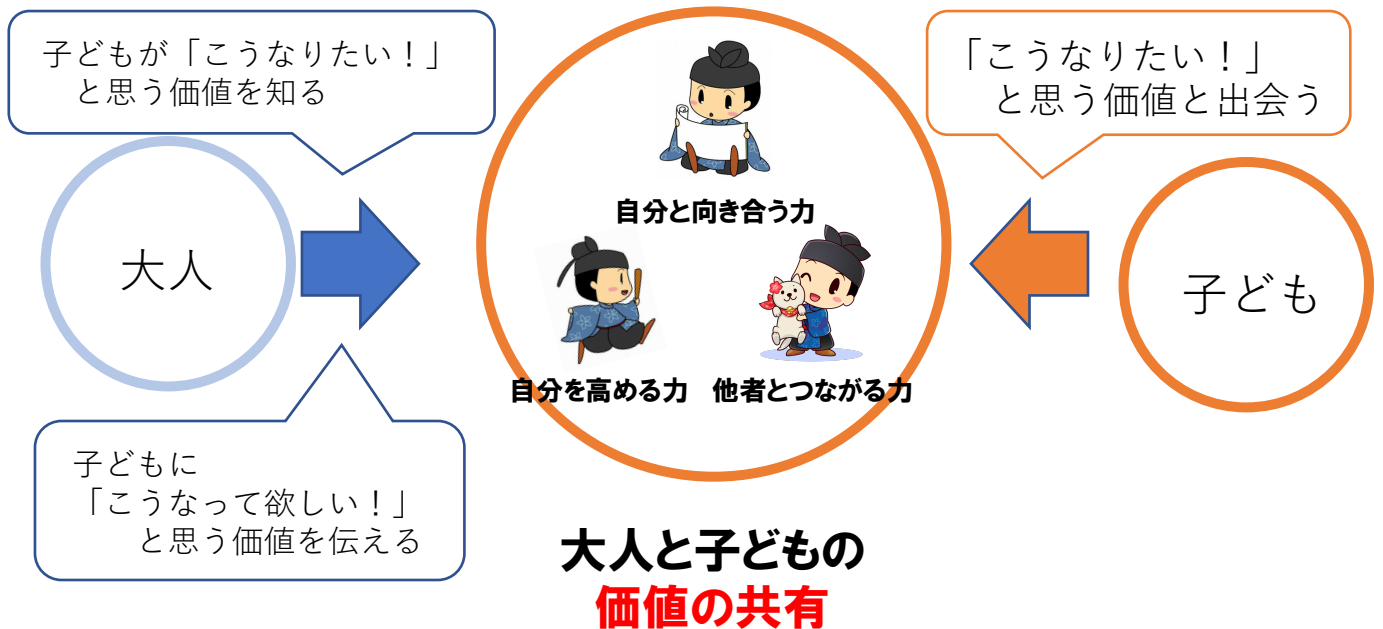
変容しにくい

非認知能力は乳幼児期などの早い段階で形成される気質・性格などの変容しにくいものから、話し方や聞き方など意識的にコントロールしやすくトレーニングすることで短期的に習得できる変容しやすいものまであります。そうすると、変容しにくい非認知能力は幼児教育・小学校低学年が中心に、中間に位置する行動特性や価値観・自己認識などは小中学校で主に育むことができる非認知能力となります。つまり、非認知能力は幼児教育だけでなく、学校教育と一貫することでいつでも伸ばすことができる力なのです。

ステップ1: 価値の共有・具体的な行動指標

押し付けではなく、意識づけを大切に！

こうなりたい!というイメージを持ち「やってみたい!」
「やってみよう!」ということ(価値)を
子どもが意識して行動しつづけることが大切です。
大人は子どもと意識を共有し(価値の共有)支えることが大切です。



太子町で伸ばす7つの非認知能力

太子町で伸ばす非認知能力「行動指標」

子どもと大人で共有する価値と具体的な姿(行動)を示したものが、
太子町で伸ばす非認知能力「行動指標」です。行動指標はレベル1
からスタートするなど枠にはめるのではなく、子どもと大人で価値・姿
を共有するためにあります。

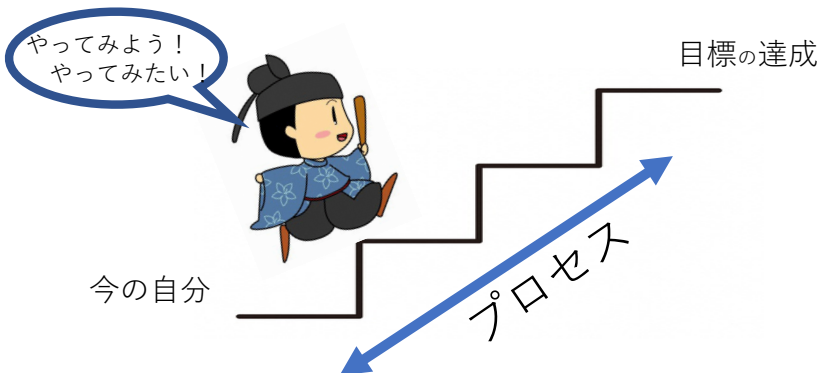
キャリアパスポートなどで公表して
学校教育で活用
(子ども・大人・保護者・地域と共有)

幼小中一貫教育で育む非認知能力と行動指標

	太子町で育む 7つの非認知力	1	2	3	4	5
つながる	伝える力	自分の考えや気持ちを一方的に伝えることができる		自分の考えや気持ちを相手がわかるように伝えることができる		自分の考えや気持ちを相手にわかるように配慮しながら伝えることができる
	受け入れる力	相手の話を聞くことができる		相手の立場を理解し相手を知ることができる		違いを受け入れ、よりよいものを生み出すことができる
自分を高める	協働する力	目標達成するために仲間とともに話し合うことができる		目標を達成するために仲間とともに話し合い、行動することができる		仲間とともに話し合い、行動し、目標達成のために工夫改善することができる
	目標・夢を持つ力	抽象的ではあるが夢や目標を持つことができる		具体的にやりたい自分・理想を描くことができる		夢を目標として具体的に行動に移すことができる
自分と向き合う	挑む力	とにかくやってみようとすることができると		苦手や困難なことでもとにかくやってみることができる		困難なことでもチャレンジすることができる
	あきらめない力	苦手なことでも向き合うことができる		苦手なことでも粘り強く取り組むことができる		苦手なことでも粘り強く最善をつくすことができる
	自分を調整する力	思い通りにいかない状況に向き合うことができる		思い通りにいかない状況があっても気持ちを切り替えることができる		思い通りにいかない状況があっても気持ちを切り替え、次にできることに取り組むことができる

ステップ2:見とる→フィードバックで意識づけ①

“結果ではなくプロセス”の中で 大人が価値を見つけること（見とる）が大切!



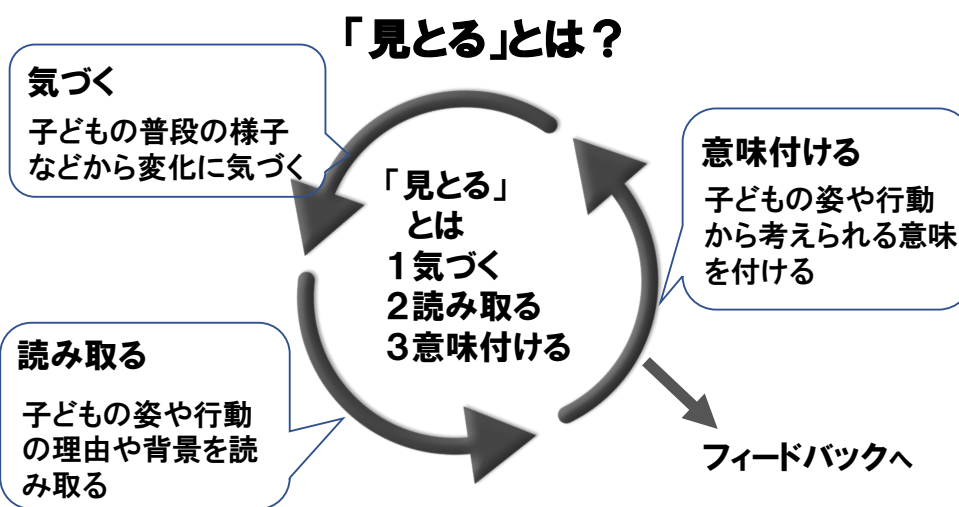
「できた、できなかった」という結果のみでは限られた見方しかできませんが、プロセスではいろいろな見方ができます。そこで大人が意識するポイントを次にまとめます。

①子どもの姿・行動から見とる

様々な活動の中のプロセス(子どもの姿・行動)から大人がいろいろな視点で価値を見つける。

②見とった後はフィードバック

子どもたちに価値を伝えることで子どもが価値を意識できるようにしましょう。



見とる→フィードバックすることで、大人が子どもに価値あることへの意識づけをおこないます。フィードバックをすることで子どもと大人の価値の共有となります。

価値の共有がすすみ、子どもが自分からその価値を意識して行動できるように、大人は「見とる→フィードバックする」を繰り返して、子どもへ意識づけをおこないます。**価値の強要ではなく、共有することが大切です。**

フィードバックすることで子どもと大人で価値が共有 「フィードバック」とは?

ほめる＝価値として大人が認めたいこと

子どもに伸ばして欲しいと思うこと。ほめることで行動が強化される。

しかる＝価値として大人が認めたくないこと

子どもに伸ばして欲しくないと思うこと。しかることで行動が弱化される。

ステップ2:見とる→フィードバックで意識づけ②

「見とり」と「フィードバック」の専門性を高める



経験を積む



知識を得る



同僚とのコミュニケーション

教師の職業は対人援助専門職とよばれることがあります。対人援助専門職者とは**援助の必要な人と実際にかかわって援助活動を専門的にこなっている人**であり、その中で「見とり」と「フィードバック」はとても大切な専門性になります。

「見とり」と「フィードバック」には正解がありません。**経験と知識の高まりと、チームでの共有(同僚の先生との会話)が大切**になります。

子どもの現状を適切に見とる(気付く 読み取る 意味付ける)、見とったことを子どもにあった言葉で、適切なタイミングでフィードバックをするためにも日々子ども理解(経験値・知識)と様々な大人の視点の共有(同僚とのコミュニケーション)が大切となります。

見とりとフィードバックのレベルを上げる

子どもの様子を見とり→フィードバックを行う中でも、いくつかのレベルがあります。**教師として見とり・フィードバックのレベルを上げることを意識して子どもと接することが大切です。**

プロセスの中で子どもがはっきり自覚している価値を共有すること(レベル1)からはじめて、価値ある姿を大人の中で持ち、それを曖昧にせず、価値ある姿として共有し、習慣化すると子どもが無自覚になっている姿や否定的に認識していることも価値ある姿として見とることができます。

教師「見とり」4つのレベル

レベル4 子どもの否定的な認識を肯定的認識に！

リフレーミングによって価値ある姿として見とる

レベル3 子どもの無自覚になっている価値の自覚化！

子どもにとって当たり前・習慣化によって子ども自身が見えなくなっている姿を価値ある姿として見とる

レベル2 曖昧にせずに価値観を持って子どもの変化を見とる

意識しないと流れ去っていくことも、曖昧にせずその都度価値ある姿として見とる

レベル1 子どもがはっきりと自覚している価値を共有

プロセスの中で本人がはっきり自覚している価値を共有(子どもの認識の受け止め)

ステップ2:見とる→フィードバックで意識づけ③

子どもに「価値」を意識づけするための大人の関わり

子ども自身が「伸ばしたい」「伸ばそう」と意識すれば行動が変わり、非認知能力を伸ばすことができます。そのため、見つけた価値をすぐに子どもに伝えて意識づけをしましょう。(価値を共有しましょう)

しかしながら、子どもとの距離の近さによって大人が子どもに「こうなってほしい」と思う要望が実際の子どもの姿を上回ってしまい、価値が見えにくくなることがあります。そのような時に見方を変えてみる(リフレーミング)することで、良い面、価値ある面が見えてきます。

リフレーミングで大人の見え方を変える

リフレーミングによって見え方を変えると子どもたちの可能性を広げていくことができます。

リフレーミングとは



例えば(コップの半分水がある)
半分しか水が入っていない・・・
↓
半分も水が入っている!



集中力がない
臆病
わがまま
我慢できない
飽きっぽい
ずるがしこい
気分屋
うそつき
計画性がない
けんかっばやい
マイペース
だらしない
周りが見えない



様々なことに興味がある
慎重に物事を進められる
自分の意見が伝えられる
自分の気持ちに素直になれる
好奇心が旺盛
知性がある・賢い・先が見通せる
物事にこだわらない
相手の気持ちを想像できる
行動力がある・応用力がある
情熱的である・失敗を恐れない
自分の世界を持っている・信念がある
おおらか・楽観性がある
一つのこと集中できる

リフレーミング

非認知能力を伸ばすための大切なポイントを整理

- 1 : 子どもと共有する価値を決める・伝える
- 2 : 普段からの「見とり&フィードバック」を意識
- 3 : 価値観の押し付けではなく、意識づけ

ステップ3:より積極的で意図的な「仕掛け」

引き出したい力・姿・行動を明確に**大人**が考える



その姿・行動・力を引き出す「仕掛け(ギミック)」を考える

子どもとつきたい力を共有して、子どもによる振り返りの質を上げる

非認知能力を伸ばす「仕掛け(ギミック)」は、大人が子どもに直接的に働きかけて、何かを教える、身に付けさせるものではありません。子どもたちの成長や発達につながる体験を大人が意図的につくり、その中で**子どもたちが自ら非認知能力を身に付けて**いけるように**間接的に働きかける**ことです。

そうすることで、「仕掛け」は子どもたちの体験の中に豊かなプロセス(姿・行動)を作り出すことができるのです。

大人は子どもが自主的に非認知能力を伸ばす環境・状況を整える
→キーワードは **意図的なギミック(仕掛け)**

粘り強さが必要な問題を出してみる

2人以上の協力が必要な活動

ギミック
(意図的な仕掛け)

もっとやってみたいと思う体験

意欲が湧く導入

ギミックの3つの側面

ギミックとは非認知能力を使う・発揮する場面・仕掛け・環境を大人が意図的に作ること。

ねらい・意図

そのギミックによって、どのような非認知能力に刺激を与えたいのか？

環境調整

空間・教具・活動をどこに仕込んで、どういった環境をつくるのか？

感情のうごき

そのギミックはただの仕掛けではなく、感情を動かせるのか？

※非認知能力を伸ばす刺激は感情の動きが大きい時ほど強くなります※

ステップ4:自ら振り返ることで非認知能力を伸ばす

子どもがスイッチを入れて(自ら選び)取り組む→振り返る



子どもが
つけたい力(価値)
を自ら選ぶ



取り組む



取り組みで自分は
どうだったか振り返る

振り返りの質を高めるために

子どもが自身の取り組みを言語化できる(振り返りの質を高める)ようにすることが大切になります。そのために振り返る力を育成することが重要となります。
振り返る力とは自分自身を客観的に振り返り言語化する力です。そのためには**振り返りの習慣化**が大切となります。

振り返りのレベル(目安)

例「授業の問題演習の振り返り」

レベル4

- ・これからの改善や方針についても文字にして振り返る

例「スマホを見る時間は10時までにして、早く寝よう」

「今後の見通し」が書けている

レベル3

- ・どうして自分がその思いになったのかを文字にして振り返る
- 例「なぜなら、スマホに集中して寝るのが遅くなって眠たかったから...」

なぜそんな気持ちになったのか「理由・原因」が書けている

レベル2

- ・取り組んだことについて自分の思いを文字にして振り返ることができる。

例「今日はやる気が出なかったから集中して演習問題ができなかった。」

レベル1

- ・取り組んだことだけ文字にして振り返ることができる。
- 例「今日は演習問題をやった」

ステップ5: AARサイクルで教師もアップデート

反省的実践家とは



ドナルド・アラン・ショーンは教師は反省的実践家であるとして、一定の正解はなく、社会情勢など様々な文脈に依存する職業であり、日々の省察を通して、常に新たな気づきをもとにアップデートしていかないとはいけないと言っています。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Donald_schon_pic.jpg

ギミックを磨くために AARサイクルを 大切にす！

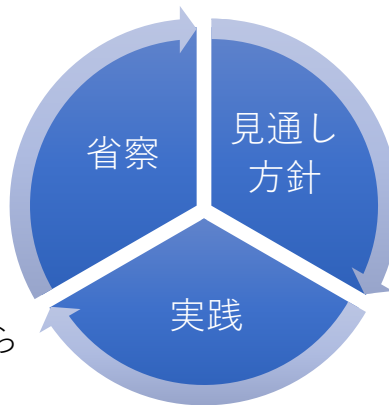
Anticipation (見通し・方針)

Action (実践)

Reflection (省察)

ギミックの成果を振り返る

対象となる子どもの**評価**から
課題と成果の明確化
今後の方針に活かす



ギミックを考える

対象となる子どもの**現状**
から課題を発見、課題の要
因を分析課題に向かう方針
を明確化

ギミックをやってみる

対象となる子どもの**反応**から
姿や行動の見とり
必要に応じて実践の修正

AARサイクル
「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」で以下の通り紹介。
「見通し・行動・振り返り(AAR)サイクルは学習者が継続的に自らの思考を改善し、集団のウェルビーイングに向かって意図的に、また責任を持って行動するための反復的な学習プロセス」

授業を通して、AARサイクルを繰り返す

Anticipation (見通し・方針) 授業前

- ①子どもの実態の見とり
- ②授業を通して子どもののばしたい力を明確に決める
- ③伸ばしたい力のための教材・教具（ギミック）の検討
- ④ギミックによって引き出せる子どもの反応を予測
- ⑤発問や個別支援の準備



Action (実践) 授業中

- ①授業開始時に伸ばしたい力を子どもと共有
- ②授業の中で子どもを見とりフィードバック！
- ③授業の様子と目標の差の調整のため、軌道修正や個別支援
- ④子どもと共有した力に関する振り返り



Reflection (省察) 授業後

- ①授業を通して伸ばしたかった力について子どもの姿から省察
- ②子どもの振り返りを活用し省察
- ③①②を踏まえて、どうしてそうなったのか原因や理由を検討
- ④検討を踏まえて今後の授業の改善・伸ばしたい力の再検討